

以上極めて大ぎつばな筋の通らぬものとなつたが、要するに私自身としては今日の上落語に寄せられた先輩各位の新しい改造案に對しては消極的な考へしか持ち得ぬことは甚だ残念である幸ひ私のこの管見を打破つて新しい大阪落語の爲に萬丈の氣を吐ゐて下さる勇士の出られんことを期待してこゝに筆を擱くことにする。

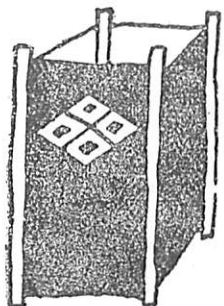
尙南北さんのお説を勝手に切り抜きして引合に出した非禮を深くお詫びすると共に後進の爲に啓蒙の勞をとられんことを切望してやまぬ。

一一・六・一八稿

月極愛讀者各位に御願ひ

誌代の前金が切れました節は雑誌に振替貯金の拂込用紙を挿入してお送りいたします、用紙が這入て居りましたら前金切の印とお思ひ下さつて何卒お拂込を願ひます。甚だ厚顔しふて恐縮なんですが何分とぼしい財政で苦しい切盛をして居る始末ですから、どうぞ御腹立なく御同情を以て此覺束ない仕事をお助け下さい。

樂語莊會計 中 濱



大阪落語

大丸騒動

五代目 笑福亭松鶴

一席伺ひますは、是は伏見大丸屋騒動と云ふ噺で御座居ます。芝居で致します吉原百人斬野治郎左工門妖刀の祟りと云ふ、町人が持つと大勢の人をば殺害する様な事に相成ります。茲に、伏見の京町に大丸屋と云ふ大家が御座いまして、兩人の子息さんが御座居ます。兄さんが惣兵衛、弟さんが惣三郎さんと申します。この惣三郎が村正の刀を二百兩の質物かたに取つて御座いまして、是が流れ込みました、惣三郎平常に何所へ行くにも、此刀を肌身放さず持つて居ました。此の惣三郎京都祇園新地へ繁々通ふて居ましたが、其頃富永町の三舛屋の抱妓でお時と云ふ藝妓が御座りました此のお時と惣三郎は深い交情になつて、終には此のお時を落籍せまして、富永町に圍者にして置ましたが、惣三郎の心算でゆくは、宅へ入れて女房に爲ようと云ふのですが、大丸屋では由緒正しき家柄ゆへなんぼなんでも泥水稼業をして居た女を宅へ入ると云ふ譯にはいかんと云ふので、種々すかして見ましたが